

ダウン症薬初の治験

生活能力低下を抑制

認知症薬を転用

思春期以降のダウン症の人に見られる日常生活能力の低下を抑えることを目指す初の臨床試験(治験)を、製薬会社「エーザイ」(本社・東京都)がアルツハイマー型認知症治療薬を用いて始める。効能が認められれば初のダウン症薬となる。研究が遅れている成人期ダウン症の人の生活の質を高める可能性がある。

薬は、1999年から、認知症治療薬として広く使われている「アリセプト」(一般名:塩酸ドネペジル)。治験は8月から全国10病院で、能力低下症状の見られ

る15〜39歳のダウン症の人数十人を対象に行い、3〜4年かかる見通し。結果を踏まえて厚生労働省がダウン症の症状を抑える薬として認めて良いか審査する。

2011年の厚生労働省研究班報告書によると、中学を卒業した年齢以上のダウン症の人の6%で、動作が緩慢になる、睡眠障害が起きる、会話が減る、閉じこもるなど、短期間のうちに、これまでできた日常生活ができなくなる症状が表れる。

研究班員が所属する長崎大などは、アリセプトが緩慢動作を改善するなどとした海外報告に着目、02年から臨床研究を実施。研究班は「有効性を示唆する成績を得た」との報告書をまとめた。製薬会社はダウン症薬としての製造・販売を求める治験の実施を厚生労働省に申請し、受理された。緩慢

遺伝情報を伝える22対の常染色体のうち、21番目の染色体が1本多いことによる先天性の病気。弱筋力や知的発達の遅れが特徴で、心臓病などを伴う例も多い。最初に論文を発表したダウン博士の名前から「ダウン症」と呼ばれる。

動作などの症状の原因は急な環境変化や精神疾患とも指摘され、治験では、こ

した要因のない人に絞る。研究班の代表を務めた奥山虎之・国立成育医療研究センター(東京都)臨床検査部長は「小児期を過ぎたダウン症の医療はこれまで置き去りにされてきたが、この薬は成人期のダウン症の人の福音になる可能性がある」と話している。

成人期の病態 研究は不十分

ダウン症は近年、主な合併症である心臓病の早期発見などで平均寿命は延びている。しかし、生活能力そのものを向上させる医療的な手段はない。大人になったダウン症の人の生活の質を高め、家族の負担を減らすためにも治療薬への期待は大きい。

ただ、長崎大などの臨床研究では、薬の効果が示唆された一方、過度な使用による下痢や尿失禁、パニック症状などの副作用も報告されている。どういった仕組みで症状が起きるのかも、解明されていない。成人期以降のダウン症の実態について、調査や研究が日本にはほとんどない。成人の診療科で診られる医師が少ないことも問題だ。今回の治験をきっかけに、成人期のダウン症の健康管理に焦点が当てられることが望まれる。